



2024年2月8日放送

社会的プレゼンス向上を目的とした薬局薬剤師による研究成果の発信方法について

こうなん薬局
村阪 敏規

突然ですが、皆さまは、薬剤師の社会的な存在感や価値を高めるために、どのようにして研究成果を発信すべきだと考えますか？

今夜は、薬局薬剤師がどのように研究成果を発信し、薬剤師としての存在感や社会における役割や価値を高めていくかについてお話しさせていただきたいと思います。正直なところ、私自身は論文の数など他の先生方に比べればまだまだ少ないため、学ぶべきことがとても多いです。それでも、私がこれまでに経験してきたこと、学んできたこと、感じたことをみなさまと共有することで、今回のテーマについて一緒に考えていけたらと思います。

実は今夜の内容は、2023年3月に北海道で開催された日本薬学会でのシンポジウム「医療薬学研究成果を通じた臨床薬剤師の社会的プレゼンス向上を考える」の中で薬局薬剤師の立場から私が発表した内容をわかりやすくアレンジしたものをお話しさせていただきます。

まずは、薬局薬剤師の現状をお話しするために、私が所属している薬局について少しだけ紹介させていただきます。私は三重県津市にあるこうなん薬局に所属しています。在宅医療にも力を入れています。在宅医療の現場では、医師や看護師と一緒に同行し、患者さんの自宅を訪問するスタイルをとっています。そのため、薬剤師が必要な情報をその場で収集でき、患者さんに最適な薬学的な介入をリアルタイムで行うことができます。このように在宅医療を通して、薬剤師の役割が身近に感じられ、以前よりも存在感が高まっていると感じています。

個人的なエピソードとして、元旦の朝、まだ暗い夜道を車で走りながら、私は患者さんのために薬を届けました。その日の初日の出は、非常によく覚えています。後日、その患者さんの自宅に定期訪問すると、「あの日、元旦に薬を届けてくれて、本当に助かりました」と思い出したように感謝の言葉を何度も伝えてくれています。

次に、ここ最近の話題として新型コロナ感染症の影響について触れたいと思います。

この3年は、新型コロナウイルスが世界を大きく変えた3年で、私たち薬剤師にとっても大きな変化がありました。新型コロナ患者さんの自宅への薬の配達、ワクチン調製などで私達の役割が増え、さらにはワクチン接種の担い手の候補として薬剤師が議論されていたこともありました。さらに、新型コロナ治療薬の相互作用のチェックや適正使用、他職種からの信頼も一段と高まったように感じています。みなさまもそのように感じていたのではないのでしょうか。私は、新型コロナ患者さんが住む雪が降る山の奥の自宅まで薬を届けたこともありました。雪が降る中での配達は困難でしたが、患者さんからの「雪の日に遠いところまでありがとうございます」という温かい感謝の言葉は私にとって深く印象に残っています。

このように、薬剤師に対する信頼や存在感が以前より高まっていると思いますが、さらなる向上を考えた時に、「研究」という視点は、さらに、これらを向上させることができる可能性を秘めており、「研究」は今後の薬局薬剤師のキーワードの一つだと思います。

「研究をするということ」は現実的には、薬剤師は日々の業務に追われている毎日で、研究に割く時間があまりなかったり、薬局単体で収集できるデータが少なかったり、研究テーマが見つかりにくかったり、学会報告・論文を書く作法がわからないなど、薬局薬剤師が主体的に研究を行うには大きな障壁があると思います。

ただ最近では、大学院への進学や、三重県薬剤師会のように地域薬剤師会の支援など研究を行うためのサポートも増えています。そのため以前よりはハードルが少なくなりつつありますが、まだまだ課題は多いと考えられます。

ここから具体的に私が行った事例についてお話ししたいと思います。私は研究の実績が全くなかったため、なかなか協力を得るのが難しい中、一人で研究データが取れるテーマがいいと考えていました。ある日、薬局で小児に吸入指導をしているとき、私はふと疑問に思いました。果たして本当にこの子は薬をうまく吸入できているのだろうか？と。この問いから私の研究が始まりました。結果的には一つの施設で、一つの薬剤に絞って、吸入薬であるインフルエンザ治療薬・ラニナミビルに関する研究をすることにしました。もちろん、当時は大学院生なので指導教官の先生などから沢山の助言をいただきました。

この研究を行い、データを整理するととても面白い結果ができました。吸入力が弱い小児は十分な量が吸入できていないことがわかり、3~4回繰り返し吸入することで、十分な量が吸入できることが示唆されました。

この研究の裏話ですが、実はとても大変で、今でもとても印象に残っています。

特に記憶に残っているのは、5歳の子どもに吸入指導を行った時のエピソードです。「嫌だー」と泣いてなかなか吸入してくれなかったり、1回目の吸入が苦かったのか、2回目をとても嫌がったり、時には子どもを落ち着かせるために、おもちゃや笛を使ったり、ポケモンなどの話をしながらリラックスさせる工夫をしました。

私はマスクを外してデモ機を用いて実際に吸入を実演する必要があったので、私自身が10数年ぶりのインフルエンザに感染してしまいました。論文だけでは伝えることができない、裏話が

論文には存在するのではとも思います。論文の裏話を書いたエピソードを共有するのも面白いかもしれません。

話は脱線しましたが、この研究を無事に論文化することはできました。その後、考えたのは、この研究で得られた情報をどのようにして社会に役立てるのかということでした。

研究結果からラニナミビル吸入剤を使用する患者さんの吸い残しがないようにするためには、残量を確認しやすい工夫や、繰り返し吸入などの吸入方法の工夫が必要だと感じました。このような改善点の重要性を発信することが、次のステップだと考えました。

まずは、製造販売会社にこの論文を通して情報提供しました。そして、薬局のホームページで内容をわかりやすく紹介して、論文の URL も載せました。また、SNS を活用することも重要だと考えました。というのも、SNS で情報発信することで、論文の引用数にも影響があると報告されているからです。

その後、論文が出たためなのかは明らかではありませんが、ラニナミビル吸入剤のデバイスの一部が透明トレイになり、吸入後の残量が目でみて確認できるようになり、繰り返し吸入の必要性があるかを判断できるようになりました。

薬剤師が日々の業務で直面する課題を、研究を通じてどのように解決していくかというプロセスがこの事例を通して、明らかになったとも感じています。

この後、私が運営するウェブサイト上で、ラニナミビル吸入剤のデバイス変更を掲載し、さらに、論文の URL や内容の一部を公開しました。独自の website を構築し、掲載することも情報発信の良い方法だと思います。

この独自の website は、私が構築したもので、薬剤師向けに医薬品情報を共有できる website である SAGASU-DI です。この website は誰でも閲覧できますが、情報の質の向上を目指して、会員制に移行し、新たな website 「CloseDi」を開設しました。「CloseDi」という名前は医薬品情報に親しみを持ってもらう「クローズ」と薬剤師限定という「クロースド」の意味を組み合わせました。

2024 年 1 月現在、約 3,500 人以上の薬剤師が会員として登録しており、会員向けのメルマガを毎週配信しています。このメルマガは、最新の論文の内容も紹介しています。最近ではメルマガを通じて、薬剤師が書いた論文を周知することもいいのではと考えています。

医学雑誌は数多くあり、Pubmed などで検索できるものが約 5,000 雑誌あります。IF (Impact Factor) も重要ですが、経営的な視点からも雑誌の価値を上げるような工夫がされています。例えば、図で示したアブストラクトや動画で論文をまとめたり、SNS での投稿数を視覚的にわかるように工夫されている雑誌もあります。

私もわかりやすく効率的に情報を伝えたい時は、イラストや図を使って簡潔にまとめる努力をしています

最後に、まとめると、薬剤師の業務は地域包括ケアや服薬フォローなど、業務が多様化しており、薬剤師の職能がより認知される機会が増えています。これからは研究活動も重要で、研究成

果を論文化し、それを広く周知することが必要です。

私自身、SNS を積極的に活用しており、特に反響があったのは、尿を着色させる薬の一覧をクレヨンをモチーフとしたイラストで表現した投稿でした。わかりやすく、共感できる情報発信の工夫は薬剤師の社会的な認知度とプレゼンスを高めるのに重要だと思います。薬剤師による研究は学術的な側面だけでなく、医療現場や患者の治療の質の向上にも貢献することを忘れてはいけません。